

東京喰種:re√C 薄ら  
寒い喜劇

傀儡兵C

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

人を食らう喰種という種族と戦う組織CCG。もし、ある切っ掛けで主人公がカネキケンではなく佐々木琲世という人格に重きを置いたら、そんな妄想です。

文字数少なめでちよこちよこ更新！

# 目次

第一話	主人格・佐々木琲世	1
第二話	兄弟弟子	5
第三話	・S 1	9
第四話	・穏やかな時	13
第五話	・教え子の安否転回	16
第六話	・当然に	19



# 第一話 主人格・佐々木琲世

幼い「僕」が狂気に溢れた目で、「僕」の首を絞める僕を見ている。よだれを垂らしながらソレでいいと言いなながら。

「……………それでいいんだよ、糞野郎」

僕の救い。お前の救い。気づけば僕はたくさんいて、過去の記憶を蘇らせようとしている。その時、僕はどうなるのだろうか。

……………報われて良いつて勘違いしてた。

——本当に？

僕が何をしたというのか。僕は幸せな夢。死ねば悲劇的でドラマチックな最後が待っている。目が覚めたら少し泣いてしまうだけの佐々木琲世という存在。

サツサン……………どこからか声がした。

夢はもういい。夢ではなく現実生きて……………悲劇でなく喜劇を見たいと気まぐれを起こしたものだから、思わず叫んでしまった。取り返しのつかない言葉を。

「僕は……佐々木琲世だ！」

おやすみカネキケン。

目覚めた瞬間に琲世が感じたのは痛みだった。ただひたすらに強い力で殴られている。それを行っているのは痛々しい見た目の喰種。

「私は……！ 愛され……る」

目も口も雑に糸で縫い付けられているが、それも意味があるのかどうか。現に彼、あるいは彼女は目を見開き、大口を開けて一心不乱に叫んでいる。

それは自分の中にある自分たちのようで、楽にしてやらなければいけない。琲世は痛みの中、自然とそう思った。

足を使って、殴りかかる腕に絡みつけ投げ上げた。それは単純に人間の体術だった。違うのは佐々木琲世が半喰種であり、彼らと拮抗するだけの力を持っているということだ。

投げ飛ばされた喰種は鉄骨の上で、高みの見物を決め込んでいた怪物に向かつて飛んでいった。

「あくあ、むはっ。つまんな」

笑いながら、本当につまらなそうな怪物……包帯女はそれまで琲世を殴っていたカナエという名の喰種を無造作に投げ返した。本当にただつまらないからという理由で。

「さて、さて、このままじゃあ本当に玉無しのガキになっちゃうし……もう一度叩けば治るかなあ」

包帯女がメリメリという音を立てながら、異形の怪物と化していく。人型であったことなど思い出せないような姿になった瞬間、怪物……隻眼の梟は凄まじい勢いで跳ねた。

巨体ながら、反射できないようなその速度はトラックのようだった。

横振りの一撃。佐々木琲世はカナエに殴られ続ける前に、これを食らって気絶状態になったのだが……彼はそれをただ体を斜めにするだけで躲した。

「アレエ？」

「……宇井特等、こちら佐々木！ 彼を発見！ 同時に隻眼の鼻が強襲！」

カナエにもがれた腕をもどかしく感じながら、弾き飛ばされたはずのクインケ・ユキムラを探して“佐々木琲世”は廃墟にも似た屋内を駆け巡る。人とは思えない速度で。



## 第二話・兄弟弟子

佐々木琲世は攻め手に欠けていた。しかし、多くの捜査官を殺しに殺した隻眼の梟の猛攻を、流麗な動きで躲し続けるのはかつての彼にも不可能なことだった。

それは彼の精神世界における優劣順位によるものだ。ある種の多重人格者であった彼は「佐々木琲世」が他の人格をほぼ完全に掌握している。そのため、喰種としての強さよりも捜査官としての強さが表に出ていた。それも身体能力はそのまま。

ただし、その分赫子の扱いには制限がかかる。ちぎられた右手を修復した時、彼自身も理解できない理由で量が抑えられてしまった。

RC細胞の割り振りが自己強化へ偏る……自分はあくまで人間「佐々木琲世」であるという無意識のトラウマの発露だった。

「佐々木上等！」

避けるしかないとところに一本の刀にも似た、対喰種兵器……クインケ・ユキムラが宙を舞って落ちて来た。実に良いタイミングで現れた宇井特等とその部下達が駆けつけ

たのだ。

「ありがとうございます！ 宇井特等！」

赫子で作られた右手が刃を握る。Bレート甲赫・ユキムラー/3。甲赫は起動時間が長い上に、相性で梟の羽赫部分と相性がいい。ギミックこそ無いが、この場にうつつけだ。

「佐々木上等と私が前に出る！ 他は後方支援に回れ！」

「ん？なんか、どつかで見た顔だあ」

おかつば頭が特徴の宇井特等は、梟と以前戦っている。ゆえにご都合の良い援軍でもあるが、同時に隻眼の梟の力量をもっとも良く知る人物だ。

「そこで倒れているのが、月山の彼ですが……」

「梟相手だけでも笑えてくるのに、それが時間制限付きか……有馬さんが間に合うはずもない」

「ついでに月山の従者も一人残っています。消耗はさせましたが、まだ動いてくるでしょう」

「それは後衛と後続に任せるしかないよ……」

梟と対峙しながら、部下の死を一旦置くことができた宇井はもうひとつの事実に気付く。佐々木琲世に対する隔意が薄れている。以前から半喰種である琲世を警戒し、手柄を立てることすら危惧していにも関わらず、すんなりと肩を並べられた。

なんとというか、以前の彼と何かが違うことを感じ取ったのだ。琲世自身も「捜査官」として喰種を駆逐することに以前ほど抵抗が無くなっていた。

「よついでらしよ」

再びの大振り、宇井と琲世は体を傾げながらの攻撃で、振るわれた腕を避けつつも相手を斬った。彼らには共通点があった。最強の捜査官とうたわれている有馬貴将の薫陶を受けた、いわば兄弟弟子なのだ。

「あくあくつまんな。私の玩具は好きにしていよ。もう飽きた」

そこで梟は思わぬ行動に出た。背中に棘とも羽ともつかぬ器官を生やし、凄まじい勢いの棘を発射した。狙いを付けてもいないだろう大雑把な攻撃は、それだけに回避を難しくした。

大きく吹き飛ばされた二人の捜査官が、裂帛の気合と共に立ち上がると……：……：隻眼の梟の巨体は既にその場に無かった。

## 第三話・S1

その後……残った月山の従者は異常な耐久力で、宇井特等の部下を大いに苦戦させた。しかし、隻眼の梟が離脱したことによって佐々木上等と宇井特等が加わったことによりついに倒れた。

一方、月山の当主である月山観母が移送中に脱走。そのため、月山の後継者は情報収集のためにコクリア送りとなった。

前線に立っていたことにより、宇井特等達S1班の実働部隊は評価を上げた。逆に全体を見る立場にあった和修政は元々反対派が多かったことも加わってわずかにそのキャリアに傷が付いた。

琲世はそんな周囲の評価を気にする余裕は無かった。月山家討伐において、教え子の一人が殉職したのだ。役割と命令上仕方無かったが、その場に自分はいなかったという罪の意識で琲世は自縄自縛していた。

そんな中、S1班の会議室で曇った顔のまま琲世は宇井郡と相対していた。

「Q S班とは溝が出来てしまったようだね」  
クインクス

「ええ……ですが、瓜江君がよくやってくれているようです」

というよりは元々琲世に反抗的だった瓜江が人間的に成長したことによって、彼らが自立し始めたというべきだろう。必然的に指導役だった琲世はQsの中心から、徐々に離れつつあった。

「指導役を辞めると聞いた」

「はい。僕には因縁が多すぎる。それが彼らに飛び火しては……」

宇井はタバコに火を点けた。中性的な外見からはそういった印象は無いが、彼は愛煙家だった。しかし、いままで琲世の前で吸ったことは無い。

「佐々木くん。正直、私は君が嫌いだった。暴走の可能性がある捜査官など喰種よりたちが悪い。現に0番隊時代から君は幾度も敵に近い存在だった」

「宇井特等……そう、ですね……」

「だが、なぜかな。今の君はもう少し距離を縮めても良いと思える」

「は……?」

タバコを灰皿に押し付ける。そこにあった火は消えて、タバコからまだ火の点いていない葉が見えた。

「私はハイルを失った。キジマ班のことも含めて、S1班はその機能が大きく低下している。そして、私もパートナーが不在だ」

「宇井特等、まさか……」

「そう。手っ取り早く戦力を補充したい。Qsも鈴谷班も和修特等のS2版に編入される。そこで……君をスカウトしたい」

琲世は寂しさと同時に胸が張り裂けそうな感動を覚えた。危険な自分は幸せになれない。誰からも必要とされていないからだ。それが今は自身を買おうという人が現れた。

「コレが私の覚悟だ」

机の上にゴトリとジェラルミンケースに似た箱が置かれる。捜査官にとってはおな

じみの物。クインケの収納ケースだ。

その中にはかつて伊丙入が使用していた鱗赫—R a t e / S + ……A u s が収められていた。



## 第四話・穏やかな時

その日、琲世は久しぶりに羽を伸ばす時間が増え、病院へと足を運んだ。

身だしなみのチェックをする際に琲世は自分の髪は以前のような真白でも無ければ、黒髪メツシユでもない灰色の髪になっていた。

また以前感じていた眼窩を貫かれるような痛みも感じなくなっている。どこか健康的な気分さえ感じていた。

そんな状態で病院へ行くとと言っても、琲世自身が世話になるわけでもない。見舞いだった。

「いやー！ こんな時でもマメだな琲世。病院食に佐々木メシがしみる」

「あはっ。内緒ですよ」

見舞われたのは伊東上等捜査官。琲世とは一緒に飲みに行くぐらいに仲が良い。半喰種であると琲世を差別しない貴重な人物だ。

戦歴も大したものだが、月山家討伐の際、アオギリのSS〜レート喰種ノロによって

負傷していた。

「琲世はS1に残ったんだって？」

「うん。まだ信じられないけど、ハイルとキジマさんが殉職して大きく穴が空いちやつたから……」

「そっか……」

伊東の顔は親しくならないと分からないぐらいに曇った。彼の班員は黒磐武臣を残してほぼ全滅していた。長年の同僚も失った。彼の様子は空元気なのだろう。

「うちのブジンなんかはS2班に協力してるし、色々心配だなあ……噂じゃ大規模な作戦も準備が進んでいるらしいから、俺もさっさと治さないとな」

「大丈夫？　なんか喰種に肋骨を改造されたとか聞いたけど……」

「琲世、話大きくなりすぎ」

二人で笑い合うが、それもどこか空虚だった。現在もつとも勢いのある喰種集団アオギリにはA+レート以上の強力な喰種が残っている。命の保証は無かった。

「こう言っちゃなんだけど、宇井特等って琲世のこと嫌ってると思ってたけどパートナーとか意外だな」

「それは僕も思ってたけど……ハイルの死でどこか思う所があつたんじやないかな。同じ0番隊経験者だし、宇井特等も……不安なのかな」

その後しばらく談笑してから琲世は病室を後にした。

最近の喰種駆逐作戦はアオギリに集中しているが、それもだんだんと数が減って来たのも皆が感じていた。それはS1班も同じだった。

理由も皆分かっていった。アオギリの構成員が段々と引き上げているのだ。組織には根城が必要で、そこに集結しつつあるのだろう。

琲世もその一人で、野良喰種を駆逐しながら任務が下準備であることを感じている。つまりは敵の根城は離れたところにあり、計画のために東京23区内の喰種をできるだけ減らしているのだ。

そして宇井特等から琲世は知らされた。アオギリ討伐作戦、流島攻略の詳細を。

## 第五話・教え子の安否転回

流島攻略戦において、宇井班は第三隊となる。役割としては前衛が切り開いた道を、掃除しながら追従するというものになるだろう。

その作戦期間は実は一週間と見積もられていた。レートの低い喰種も含めて、アオギリの樹という組織を根絶やしにするためだ。

「佐々木上等と富良上等、そして伊東上等で班分けされる。そこで……本人の強い希望で佐々木班に参加したがっている捜査官がいる……入りたまえ」

「先せ……佐々木上等！」

「六月君……!?!」

佐々木の教育したQs一期生は一人前と見なされ、各班のサポートに回されることも多かった。佐々木から貰ったアイパッチで赫眼を隠した、六月透もその一人だ。

「彼は事前の探索班に従事する予定だったけれど、君の班をサポートしたいと強い意志

を見せたそうだよ。それに侵攻時ともかく、勝利した後の島内搜索には喰種同様に感覚が優れているQsの存在はありがたい……慕われているな佐々木くん」

中性的な外見からからは熱意が漲っているのを感じられた。しかし、琲世はそれに対してやや狼狽えていた。理由は月山家討伐作戦の際に殉職者が出たことだ。

「僕は……不知君しらずのことで恨まれているのかと……」

「そんなことはありません！ あれは、先生のせいでもないし不知君もそう思うはずない……瓜江君だって頭では分かっているんです……自分の力不足を認められずに……」

「そっか……そうなんだ。ありがとう。よろしく頼むよ六月一等」

「はい、佐々木上等！」

見せつけてくれるな、と思いつながら宇井はタバコに火を点けた。しばらくくくゆらせてから、紫煙を吐き出してもう戻ってこない前パートナーの思い出を一旦外へと出す。

「Qs班は真戸准特等の部下だ。第一班になる。アオギリの樹にはまだタタラ、オウル、ラビットとSSレート喰種が三匹も残っているんだ。かつての教え子のことを考える

なら、我々の役割を全うすることだ。そうすればそれだけ横槍を防げる」

言外に命令違反をしないようにと窘めながら、宇井は琲世に語りかけた。それは真実でもある。挙げられた三人を倒すことがアオギリの樹打倒の証だと考えている者は多い。

しかし。SレートやAレートの喰種もまた多い。武闘派喰種の代表格である白スーツも健在だ。

「地の利は向こうにある。確実に手早く済ますこと。それと……折角貸してるんだ。自分のクインケを見つけるまで、大事に整備しておいてくれ」

佐々木の箱を見やっってから宇井は先に退室した。

流島攻略作戦が始まる。

## 第六話・当然に

流島への移動はCCGが保有する船で行われた。巡視船艇によく似た船に本部が設置され、ある程度接近してからは漁船のようなボートで現場の者が乗り込む。揚陸作戦だ。

佐々木班の乗るボートは、危機感とは別種の緊張が漂っていた。海を眺めながら佐々木と六月はかつてのように話せていた。

「……あんまり歓迎されていないみたいですね」

「まあ、ね。Q s 自体が非倫理的だっていう人も多いし。僕も暴走したりしたから……仕方が無いことだよ。少しずつ信頼を勝ち取るしかない。宇井特等みたいに考えを変えてくれる人も出てきてくれる」

「宇井特等はQ s 反対派……それでなぜ先生をパートナーに？」

「元のパートナーだったハイル。彼女の死が特等を変えたんじゃないかな……」

琲世は上陸後、宇井が指揮する第3隊の第2班班長として動くことになる。こうした

大規模作戦では間々あることだが、クインケ持ちは琲世と六月透だけで、あとはRcバレットの銃を装備した構成だ。

役割としては敵側の最重要幹部、タタラを目指す1班が突き進んだ後の安定にある。琲世は自分も知っていたハイルという女のクインケが入ったケースを撫でる。

「喰種を殺すことにまだ抵抗が無いわけじゃないけれど……せめて、痛みなくやれるよう頑張るよ」

鱗赫—Rate/S+……Aus。凄まじい切れ味と軽さを両立したクインケだが、元はハイルの持ち物だ。宇井特等にこれを早く返すべきだと琲世は考えている。

この戦いではレートA以上の喰種が多い。強力な喰種を倒し、己のクインケを獲得しなければならぬ。琲世はなぜかそう決心している。

Ausであれば、痛みなく、そして赫子の元である赫包を傷つけることなくたおせるはずだ。

それ以外にも気にすることは多い。第1隊には古巣であるQs部隊がいて、第2隊の隊長は友人とも言える鈴谷特等だ。



「上陸時に注意してね、透くん。敵はまずそこでこちらの数を減らそうとしてくるはずだから」

「はい……しかし、隻眼の梟は出てくるんでしょうか……？」

「どうだろう……正直言つて、流島の喰種にとつてはこの作戦が立案された時点で無事は期待できない。かといって敵だつて馬鹿じゃないし……梟がどう出るかは分からないね。一人で特等方を相手に出来る存在だ」

組織としてのアオギリはここで終わったとしても、強力な喰種……タタラと梟は逃亡する可能性を生み出すだけの実力がある。もし逃せば、また逆戻りになってしまう。

「見えてきた……！」

「いよいよだね。装備の点検を忘れないで」

ボートが速度を上げた。第1班に追従する形で進み……ついには上陸が可能な場所まで到達した。

「佐々木班！ 全員水に足を取られないで！」

行つた側から刃に貫かれる班員に、齒噛みする。守ろうとしても、手からこぼれ落ちてしまふのはなぜだと問うても答えは無い。

鋭い呼気と共に班員を貫いた喰種を、琲世はあっさりとは断した。琲世の実力もあるが、敵が小型だからでもある。小型で鋭い赫子を持つ、喰種集団「刃」。速度に長けた前衛で、できるだけ数を減らすつもりか。

しかし、個体として注意すべきは首領であるミザだけだ。均衡はすぐに崩れ、段々とCCG側へと傾いていく。隊長、班長格が上陸に成功したのもあるが、第2隊鈴谷班の恐るべき実力が発揮されたのだ。

海岸沿いは第1班の一部に任され、佐々木班は追従して海岸を抜け、島の森へと足を踏み入れた。